展示と対話のプログラム「アートセンターをひらく 第II期」関連プログラム

午後のお茶会
「あなたにとっての“変身”とは？」

砂連尾理さんは、障害や老い、母親になったことなど、〈変身〉についての対話を、ワークショップを通して一般参加者と行ってきました。このお茶会では、再び門戸を広く開いて、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』の著者伊藤亜紗さんをゲストに迎え、新たな視点から対話します。あなたにとっての〈変身〉とは？ お茶を飲みながら気軽に語り合いましょう。

日時：12/8（日）14:00ー16:00
会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー ワークショップ室「ひらくカフェ」
ゲスト：砂連尾理（ダンサー／振付家）、**伊藤亜紗**（美学者）
定員：20名（申込不要・先着順）
料金：展覧会入場料に含まれます ※お菓子代は有料です
（一般900円、高校生[同年代を含む]以下・70歳以上無料）

砂連尾 理（じゃれお・おさむ）：1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。近年はソロ活動を中心に、障害者や高齢者、妊婦などを含む、プロとしてのダンス経験のない市井の人々とのワークショップを展開。京都・舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」、宮城・閖上の避難所生活者の取材が契機となった「猿とモルターレ」を発表。また、映画『不気味なものの肌に触れる』（濱口竜介監督）の出演、振付など。著書に『老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉ーダンスのような、介護のようなー』（晶文社）。立教大学現代心理学部・映像身体学科特任教授。

伊藤亜紗（いとう・あさ）：東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授。MIT客員研究員（2019）。専門は美学、現代アート。もともと生物学者を目指していたが、大学3年次より文転。2010年に東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美学芸術学専門分野博士課程を単位取得のうえ退学。同年、博士号を取得（文学）。主な著作に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社）、『どもる体』（医学書院）、『記憶する体』（春秋社）など。WIRED Audi INNOVATION AWARD 2017受賞。

「アートセンターをひらく 第II期」
2020年に開館30周年を迎える水戸芸術館現代美術センターは、移り変わる社会のなかで今アートセンターに求められる役割を探る企画「アートセンターをひらく」を2期に分けて実施しています。本展では、展覧会を軸に対話と様々な活動を育む場としてギャラリーを活用します。

2019年10月26日（土）ー2020年1月26日（日）
水戸芸術館現代美術ギャラリー
[出品作家] 呉 夏枝、ハロルド・オフェイ、砂連尾 理、末永史尚、潘 逸舟、毛利悠子、エマニュエル・レネ
[開館時間] 9:30ー18:00　※入場は17:30まで
[休館日] 月曜日、年末年始[12/27（金）ー1/3（金）]、1/14（火）
※1/13（月・祝）は開館
[主催] 公益財団法人水戸市芸術振興財団

交通のご案内：
JR常磐線水戸駅北口バスターミナル
4ー7番のりばから
「泉町一丁目」下車、徒歩2分

問合せ：水戸芸術館現代美術センター　310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8　Tel.029-227-8120　https://www.arttowermito.or.jp/
※ケアが必要な場合は事前にご相談下さい

水戸芸術館
ART TOWER MITO